

イギリス高等教育の学年末 考查に関する考察

—何が問われ、如何なる解答が望ましいのか—

2013年5月25日(土)

日本高等教育学会第16回大会

田中正弘(弘前大学)



目次

- 本発表の目的
- イギリスの大学の学年末考査
- イギリスの大学の成績評価基準
- 考察
- まとめ

本発表の目的

本発表の目的

- 東京大学を経て、オックスフォード大学の教授となった苅谷 (2011:63)によると、在籍した両大学の教育には、「多くの講義を聴くことを中心とした学習と、多くを読んで書いて議論する」学修との違いが存在する。
- 上記の差異が日英の大学間にあるとすると、学年末考査で測定される学生の能力においても、多くの講義を聴いて修得した能力と、多くを読んで書いて議論して修得した能力との違いが存在すると、仮説を立てられる。
- そこで本発表は、この仮説を検証する目的で、オックスフォードの人文・社会科学系を参考として、イギリスの学年末考査で何が問われ、どのように採点されているのかを分析・議論してみたい。

イギリスの大学の学年末考査

学年末試験の構成

- イギリスの学年末考査は、3年制で3学期制の学士課程では伝統的に、1年目の3学期と3年目の3学期の計2回しか行われなことが多い。
- イギリスの大学(特に人文・社会科学系)における、学年末考査の一般的な構成は、10～30の質問から3問を選択し、1問につき1時間の計3時間で各問にA4で約4枚の論述式で解答するというものである。
 - 一例として、オックスフォード大学の1年生を対象とした2009-10年度の試験、「歴史学概論Ⅳ」(General History IV)の内容を提示する。

「歴史学概論Ⅳ」(1)

- 「歴史学概論Ⅳ」は、1815年～1914年の間の社会・国家・帝国について、概括して学ぶ科目である。
- 試験の質問は24問あり、3時間以内に自ら選択した3問に解答する。なお、2つ以上の国を例示しながら解答することという但し書きが付されている。
 - その主な質問は、下記の通りである(University of Oxford 2010:2-3)。
 1. 都市生活はどれだけ劇的に変化したか？
 2. 人口増加の要因は何だったか？
 3. 工業の発展は農業の衰退と、どの程度関係があったか？
 4. 社会主義政策は労働者階級の問題をどの程度反映していたか？

「歴史学概論Ⅳ」(2)

5. 貴族の権力と威信は1914年までにどの程度変化したか？
 6. 小作農民は政治でどのような役割を演じたか？
 7. この100年は「中産階級の世紀」だったか？
 8. なぜ官僚制度が広まったのか？
 9. なぜ1815～1849年の間に多くの革命が起きたのか？
(中略)
 24. 公共の建造物は市民生活の変化をどの程度反映していたか？
- このように質問は抽象的で、いかようにも答えられる内容が一般的である。それから、客観式の質問(○×式・穴埋め式・多肢選択式など)は皆無に近く、短答式の問題も(特に人文・社会科学系では)、ほとんど見られない。

「比較行政組織論」

- 卒業年度である3年生を対象とした学年末考査でも、質問の形式は概ね同じといえる。ただし当然ながら、質問の内容は、より難解なものが多くなる。
 - 例えば、オックスフォード大学の科目、「比較行政組織論」(Comparative Government)では、3時間以内に12問中3問を選び、解答する。2010-11年度の主な質問は下記の通りである(University of Oxford 2011:2)。
- 3. 強力な司法組織は基本的権利の擁護を保証する、最も確実な方法であるか？
- 6. 「国会議員は、彼らの間で権力が不均衡に認められた方が、より効果的に働ける」。(この意見の是非を)議論せよ。
- 10. 民主化は根本的に経済発展の問題か？
- 12. 「政治学者はたいてい歴史を引用するが、歴史学者の真の理解者ではないことが多い」。これは問題か？

「開かれた概念」(open concepts)

- 抽象的な質問に、イギリスの大学生は、どのように対応すれば良いのだろうか。
- Greetham(2008)は、問題(出題者)の意図を読み取る重要性を強調した上で、鍵となる概念を見つけ出すべきだと提案している。
- そして、その探索方法として、「開かれた概念」(open concepts)に着目することを、勧めている。
 - 開かれた概念を説明するには、その反意語である「閉じられた概念」(closed concepts)を示すと分かりやすい。

閉じられた概念と開かれた概念

- 閉じられた概念には、三角形などがある。大辞泉(1995: 1105)の説明では、三角形は「三つの線分で囲まれた多角形」のことである。この説明は世界のどこでも正しいとされ、反論の余地がない。
- 対照的に、開かれた概念は、時代・国・人によって、解釈が変容するものである。代表的な単語に「民主主義」(democracy)を挙げられる。
 - 古代ギリシャで誕生した民主主義と、17～18世紀ごろの市民革命で形成された民主主義、および現代の民主主義が異なるのは、容易に想像がつく。同様に現代の民主主義の意味も国によって大きく異なる。このため、辞書を参照しても、民主主義の意味を結論づけられない。

開かれた概念を持つ単語への対応

- 開かれた概念を持つ単語が質問に含まれる場合は、学生はその単語の解釈を、多面的に、かつ批判的に議論することを求められる(Greetham 2008)。
 - 先記した歴史学概論Ⅳの質問1、「都市生活はどれだけ劇的に変化したか？」では、「都市生活」という開かれた概念に着目すべきだろう。そして、都市生活の定義を、二名以上の研究者の言葉を引用しつつ、説明することが望ましい。
 - その定義が、例えば、19世紀初頭のロンドンとパリに当てはまるかを確認した結果、当てはまらない事柄があるのならば、それは定義に問題があるのかなど、自分なりの見解を平易に説明することが期待されている。

期待される解答

- イギリスの学年末考査では、学生は自らの見解について、代表的な理論を引用したり、参考となる事例を示したりしながら、首尾一貫した明瞭な説明を求められる。
- この作業は、特定のリサーチ・クエスチョンに基づき、学術論文を書くことと似ている。
- では、イギリスの大学教員が、どのような成績評価基準に基づいて、どのように採点しているのかを、分析してみたい。

イギリスの大学の成績評価基準

成績評価基準の共有

- イギリスの大学では通常、教育プログラム全体の学修到達目標だけでなく、科目ごとの到達目標（成績評価基準と読書課題を含む）も、プログラム会議で協議・決定している。
- 成績評価基準を学科の全教員で共有していることを前提に、授業実施、試験作成、成績評価を異なる教員が分担しても支障はないと考えられている（Price 2005）。
- このため、答案用紙の採点と成績評価は2名以上の教員が担当する規則となっていて、その内の1名は、授業担当者でないことのほうが一般的である（Race 2002）。

2つの重要な視点(1)

- 授業実施者以外の教員が採点や成績評価を担当するということは、2つの重要な視点を示してくれる。
- その1つは、採点者は必ずしも、試験の質問内容の専門家ではない可能性が生じることである。
 - 比較教育学の分野の試験問題であっても、イギリス高等教育の専門家が中国の初等教育に関連する質問を採点する場合、詳細な内容を熟知しているとは限らない。

2つの重要な視点(2)

- もう一つの視点は、授業担当者以外の教員が採点できるように、学生が知っている情報を共有できている必要があるということである。
- その情報とは、具体的に、どの書籍・論文を読んでいるはずか、という読書課題のことである。
 - これらの読書課題に、採点者も目を通しておく必要がある。
- 読書課題として、授業ごとに1～3冊・本程度の書籍・論文がシラバスに明記されている。
 - なお、先述したように、読書課題の選定は授業担当者の裁量に委ねるのではなく、プログラム会議で審議・議決される重要な案件とされている。

PPEプログラムの成績評価基準

- 具体的な事例として、オックスフォード大学の「哲学・政治学・経済学」(Philosophy, Politics & Economics: PPE)プログラムの成績評価基準を、参照してみたい。
- PPEプログラムの1年生を対象とする学年末考査は、3つの入門的科目(哲学入門, 政治学入門, 経済学入門)ごとに課される。
- ただし、成績評価基準(表1)は、ルーブリック形式で統一されたものを、**3つの科目全てに適用**する。

表1： 成績評価基準のルーブリック (PPE Prelims)

素点	100-70	69-60	59-50	49-40	39-1	0
評価基準	分析的で論述的な解答である。なお、質問に関する事実や議論に関する優れた説明が付されており、かつ明快で洞察力のある効率的な方法を構成する能力が示されている。	分析的で論述的な解答である。しかし、証拠の説明が包括的でないか、首尾一貫していないところがある。または、首尾一貫していても、分析技能の不足や不明瞭な文章構成などがある。	重大な欠陥のない十分な解答であるが、質問に対して不完全な解答か、不正確さで損なわれた解答である。または、分析や論述の技能面で間違いが示された解答である。	混乱した議論による弱点を有するものの、事実への知識や分析技能の証拠は、ある程度示された解答である。または、知識はあっても、試験の質問に焦点を当てていない解答である。	仮に効果的な学修の証拠が多少なりとも示されていても、質のとても低い解答である。	質問の指示に従っていない解答である。(例えば、政治学入門の試験は2つの国の知識を示せと指示しているが、1つの国しか言及していない解答などが該当する)。

出典：University of Oxford (2011) *Philosophy, Politics and Economics, Handbook 2011-12*, 14-15.

統一成績評価基準の一致

- PPEの3年生を対象とする学年末考査でも、**全ての科目に1つの統一した成績評価基準が適用**される。
- しかも、その成績評価基準の記述は、1年生を対象とした学年末考査の成績評価基準と、ほぼ完全に一致するのである。
 - つまり、**学生の解答に求める要素は**(学年ごとに分析や論述の深さと幅こそ違えども)**変わらない**といえる。

考察

授業内容の部分的な記憶(1)

- イギリス(特に人文・社会科学系)の学年末考査は、多くの質問の中から、3問程度を選択し、その質問のみに解答することを求める。
- よって、授業の内容を全て網羅して記憶することは、要求されていない。
- このことは、日本式の「多くの講義を聴くことを中心とした学習」のスタイルが、イギリスの学年末考査の構造と合致しないことを示唆する。

授業内容の部分的な記憶(2)

- 正確な知識(記憶)を示すことは、イギリスの学年末
考査でも、成績評価基準に明記されているように、
採点の重要な物差しとなっている。
- ただし、知らない(忘れた)ことを尋ねる質問は選択
しないか、あるいは選択したとしても、自らの解答で
言及しなければよい。つまり、知っていることだけで
分析・議論を展開しても、成績評価基準を満たせる
といえる。
 - 言い換えれば、自分の知識の限界を承知した上で、選択した質問に
対する自己の見解を分析的・論述的な方法で明瞭に説明すればよい。

学年末考査への準備に直結

- このような説明の展開能力は、イギリス式の「多くを読んで書いて議論する学修」で鍛錬されている。
 - 個別指導のチュートリアルでは、教員が定めたりサーチ・クエスチョンに対して、教員と一対一で議論できるように、周到な準備が要求される。そして、多くの学生は、教員の反論に打ち負かされながら、独自の見解を説得力のある方法で説明する術を修得していく。
- この訓練は、学年末考査への準備に直結している。
 - チュートリアルは、資金と手間の掛かる、「贅沢な」教育であるが、イギリスの多くの大学で、その実施の重要性が強調されている。

まとめ

まとめ

- 本発表は、イギリスの大学の学年末考査で、何が問われ、どのように採点されているのかを、オックスフォードの人文・社会科学系の事例を参考に分析・考察してみた。
- そして学年末考査で測られる能力は、「多くを読んで書いて議論する学修」で鍛錬される能力と合致していることを示した。
- この成果から生まれる疑問として、日本の場合では、授業で鍛錬される能力と、試験で測定される能力は、果たして合致しているのだろうか？

日本への示唆（今後の課題）

- 日本式の授業が「多くの講義を聴くことを中心とした学習」だとすれば、学生が習得できる主な能力は、与えられた知識を記憶することなのかもしれない。
- その能力を測る試験は、知識の正確な記憶を問う客観式や短答式のテストが適切だと思われる。
- 仮に、日本の人文・社会科学系の試験の大部分が、イギリスのような論述式のテストであるならば、学生は教員によって与えられた知識を使って、不慣れな議論を分析的・論述的な方法で簡潔明瞭に行うことを要求されることになる。
- 従って、そのような訓練を受けていない学生には、不合理な試験内容といえる。

ご清聴ありがとうございました。

田中正弘(弘前大学)

参考文献

- Greetham, Brian, (2008) *How to Write Better Essays*, Second Edition, Hampshire: Palgrave MacMillan.
- 苅谷剛彦 (2011)「オックスフォード大学にあって東京大学にないもの」『週刊東洋経済』2011年7月2日号, 62-3頁.
- Price, Margaret, (2005), “Assessment Standards: The role of communities of practice and the scholarship of assessment,” *Assessment and Evaluation in Higher Education*, 30(3), 215-30.
- Race, Phil, (2002), “Between a Rock and a Hard Place,” Schwartz, P. and Webb, G., eds., *Assessment: Case Studies, Experience and Practice from Higher Education*, London: Routledge, 161-6.
- University of Oxford, (2010) First Public Examination, General History IV: Society, Nation and Empire, 1815-1914.
- University of Oxford, (2011) Second Public Examination, Comparative Government.